

『へりくだって待ち望もう』

ローマ人への手紙 3章 27～31節

青木 信太郎 牧師

イエス様お誕生の知らせが世界で一番最初にもたらされたのは、野原で夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちでした。夜も更け、静まり返った野原で野宿しながら疲れた体を休めていた羊飼いたち。すると突然まばゆい光が射し込むと同時に天の御使いが現れたのです。あまりの突然の出来事に恐れていた羊飼いたちに御使いはこう告げます。【恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。】御使いの言葉を聞いた羊飼いたちは【さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。】と言って急いでベツレヘムに向かいます。そして飼料おけに寝ている救い主イエス様を探し当てて、お誕生を祝った羊飼いたちは【神をあがめ、賛美しながら】帰って行ったのです。この「すばらしい喜びの知らせ」が、なぜ一番最初に羊飼いにでもたらされたのでしょうか。そして一番最初にお祝いに駆けつけたのが、この羊飼いたちであったということの意味を、今朝のテキストと併せて共に味わいましょう。

◆ 私たちに誇りは無し

パウロは“信仰によって義と認められる”という最も大切な結論を語る中で、大きく三つのことを説明します。一つ目は「私たちの誇りは何一つない」ということです。厳密に表現するならば「神によって義と認められて救われる私たち人間の側に誇る要素は何一つない」という事であり、【27節】「もし私たち罪人が、ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるならば、それでは、私たちの誇りはどこにあるのだろうか？」とパウロは疑問を提示します。契約の選びの民族のしるしである割礼と律法を誇りとしていた同胞ユダヤ人を意識してでしょう。パウロはすかさず答えを掲げます。「私たちの誇りはすでに取り除かれています」と。【どういう原理(法則)によってでしょうか。行いの原理(法則)によってでしょうか。そうではなく、信仰の原理(法則)によってです。(新共同訳)】ここでパウロが説明する内容はとても重要です。行いの原理・法則というとき、その中心は自分が何を行ったのかということ。自分の行為が主体であるのです。しかし信仰の原理・法則の主体は人の側の行為を一切排除するのです。その主体は神の側にあるのであって、神がそのひとり子イエス・キリストを人の罪のなだめの供え物として十字架による贖いとしてくださったことに信仰の主体があるのです。信仰はただ神の恵みによるのです。行いの原理・法則は常に人の側の行為が追求されますが、信仰の原理・法則は神が私たちに何をしてくださっているのか、神の行為を追求させるのです。神はイエス・キリストの贖いによって私の罪を赦してくださった。一方的に私を愛してくださった。この愛、福音、よき知らせを私たちが受け取るための努力は一切排除されているのです。契約のしるしである割礼を守り行うことによって求める義、律法を暗記して唱えることで義と認められると妄信するユダヤ人の誇りに終止符が打たれたのです。律法は人に行いを要求しますが【律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。(20節)】ユダヤ人が選びの民の根拠として握り締めてきた律法という誇りは取り除かれています。そのような誇りは一切いらぬ、必要ない。パウロはただ信仰による義ということを端的に明確に確信を持って【宣言】します 28節「私たちの考えです」とはパウロの確信の表れです。宗教改革者マルチン・ルターは今朝の箇所を「人は律法の実行ではなく、ただ信仰によってのみ義とされる」と訳しました。罪人が神の前に義と認められるのは、ただ信仰によってのみであり、それ以外の要素はすべて、ユダヤ人の誇りである律法も割礼も取り除かれています。

#### ◆ 私たちだけの神では無い

“信仰によって義と認められる”という結論の中で、パウロが説明する二つ目は「救い主なる神様は私だけの神ではない」ということです。もはや律法によっては義と認められないことが説明された時点で、ユダヤ人だけが選びの民であるという限定的な考えも取り除かれているわけです。【29-30節】神はユダヤ人に律法と割礼を持って特権と使命を与えられました。しかし律法を握り締め、割礼にしがみつクユダヤ人たちは、創造者である唯一真の神を自分たちだけの神としました。罪人で偶像崇拜者である異邦人の神ではないと裁いてきたのです。神を自分たちだけのものとしてしまうとは今となっては「神を畏れるというより神を侮っている」とパウロが厳しく指摘した言葉が甦ってきます。イエス・キリストの十字架による贖いはすべての罪人に与えられている神の愛です。神様からの恵みなのです。ユダヤ人と異邦人の間に隔ての壁はありません。民族や出身、階級や地位など区別の要素はないのです。【それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません(22節)】私たちだけの神ではない。神が小羊イエス・キリストの犠牲をもって私たちを罪の滅びから買い取ってくださったのです。すべて信じる人が義と認められて神の子とされているのです。

#### ◆ 律法は成就している

“信仰によって義と認められる”という結論の中で、パウロが説明する三つ目は「信仰によって律法は成就している」ということです。神の前に義と認められるのは、ただ信仰によってのみだとするならば、では律法とは何だったのか？律法はもはや無用なのだろうか？パウロは律法によっては義と認められないが、律法は今でも有効であるということを説明しています。【31節】「絶対にそんなことはありません。むしろ信仰によって義と認められるということは、律法を確立することになるのです」ここで「確立する」と訳されている言葉は「成就する、完成する」という意味です。【わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。(マタイ5:17)】この地上において律法を完全に守り行った人物がいます。それはイエス・キリストです。イエス様は律法を完全に守り行う方であったにもかかわらず、十字架刑に従われたのです。イエス様は私たちが行うことの出来なかった律法の要求を完璧に実践してくださいました。そして私たちが律法を守り行うことが出来ないことによる罪の罰までもその身に受けて下さったのです。律法は有効であり、私たちは十字架の贖いを遂げてくださったイエス様を信じる信仰によって律法を行う者とみなされているのです。ここに神の恵みが表されているのです。

#### ◆ まとめ・お勧め

私たちは「羊飼ひ」といえば何か牧歌的な、のどかで穏やかな雰囲気を感じ描くかも知れませんが、しかし聖書の時代における羊飼ひは人々から蔑まれるような職業でありました。羊を守るために安息日を守ることが出来なかった彼らは律法の違反者とみなされていました。羊が人の畑の作物を食べてしまうと、泥棒のように見られていました。動物相手の仕事柄、彼らの服や靴は常に汚れており、羊の臭いも染み付いていたことでしょう。決して学が必要な職業ではありません。旧約律法を守ることが出来ない彼らは、取税人、遊女と並んで罪人としてみなされていました。しかし、救い主お誕生の素晴らしい喜びの知らせは、エリートである祭司や律法学者、ユダヤ人指導者や地位のある人々にもたらされたのではなく、臭くて汚くて罪人と見られていた羊飼ひたちに最初にもたらされたのです。それは救い主イエス・キリストは罪人を赦して信仰による義に導くためにお生まれになったことの象徴です。イエス様は罪人を救うために、私たちの罪のなだめの供え物として、犠牲の小羊として、十字架で血潮を流されるために、へりくだってくださったのです。“ただ信仰によってのみ義と認められる”私たちは、自らを誇りしたり何か誇るものを追求する必要はないのです。救い主イエス様の誕生を待ち望む私たち罪人は、へりくだる思いをもってクリスマスを迎えたいのです。神の前に、そして人との間でへりくだる者となることが出来れば幸いです。